

# 関西大学探検部 資料からみた五十年の歩み

水野 浩

はじめに

関西大学探検部は、一九五八年に創部され本年で五十年を迎える。この五十年間に際し、記念事業の一環として五十年間の資料整理が行われた。この資料の関西大学年史編纂室での保管にあたり、資料の概要と簡単な分析及び、五十年間の活動を紹介したい。

最初に、この資料整理を行った探検部OB会と資料整理ホームページ作成委員会（泉井力・四方立夫・安川昌浩・杉本俊也・金澤健太）に謝辞を申し上げたい。この探検部五十年周年記念事業では、資料整理の他、登山や記念式典などのイベント、映像資料を編集したDVD制作

などが行われた。

この整理された多数の資料は、データベースとして探検部ホームページ（<http://www.kuenc.org>）にて一部の映像と共に公開されているので、探検活動や学術資料として広く役立つことが出来れば幸いである。

## 1 資料整理方法

### ・データベース

データベース化において、データ入力システムがインターネット上に構築された。そして入力帳票に、各種の資料の内容についての整理番号、年代、活動名、パート、<sup>\*1</sup>

媒体<sup>※2</sup>、隊長、メンバー、露出マスコミ<sup>※3</sup>を記入して対応する保管箱に整理される。整理番号は、パート別の四桁の番号<sup>※4</sup>とする。記入された入力帳票は、担当者が、インターネット上でサーバーのデータベースに入力する方法を取った。

データ化された資料数は、一二八〇点になった。作業に関わった延べ人数は、約五十人である。(コンピュータ入力作業は、含まず)

#### ・資料の分類

探検部の活動は、「探検」という言葉に則したクラブ活動である。登山やラフティングなどの野外活動や日々のトレーニングが行われるため、体育会系クラブであると思われがちだが、文化会に属する。探検活動には、その準備においての資料の収集や緻密な計画書の作成、実行に際しての地図読図や記録映像の取得、そして報告書作成等、デスクワークもかなりのウエイトをしめる。ゆえに資料の大半は、計画書・報告書・映像資料である。これらの資料は、主な活動の種類に分類された。分類

項目は以下の通りである。

山岳探検→未踏峰の登山やトレーニングとして行われる登山など、山岳地域をフィールドとして行われる活動。河川(海洋)探検→ゴムボートで川を下るラフティングやカヌー・カヤックを利用した探検活動。シーカヤックによる海上での活動も含まれるために活動フィールドが川に限ったものではない。パドル(オール)が共通点かもしれない。

洞窟探検→鍾乳洞や海蝕洞・溶岩洞窟などの探検調査。ケービングとも呼ばれる。

海底探検→海底での調査や活動を示し、海上での活動は含まない。スキューバダイビング等である。

民族調査(調査1)→民族の社会や文化を調査する探検行為。文化人類学や民族学的な活動である。

部内活動→クラブ全員で行われる全体合宿。外苑合宿<sup>※5</sup>や歩荷<sup>※6</sup>等。

その他の探検(調査12)→上記に分類されない探検。徒歩による砂漠横断や林冠探検<sup>※7</sup>などが含まれる。

## 2 資料

資料数は一二八〇点にのぼる。リストを掲載すると二〇ページに及ぶために控える。ホームページのデータベースを閲覧願いたい。ここでは資料の概要を記述する。

資料の種類は、計画書38%、写真29%、報告書21%、その他12%となっている。(図-1参照) 活動種類別を見てみると山岳探検と河川探検で大半をしめ、その他の探検・洞窟探検・部内活動と続く。(図-2参照) また、年代別の資料数を見てみると創部十年目から三十年間の資料が四分の三をしめる。五十年間の資料が、散逸せずによく残ったものである。(図-3参照)

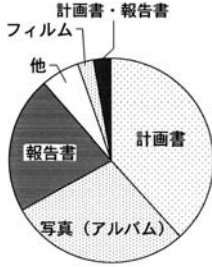


図-1 資料の種類

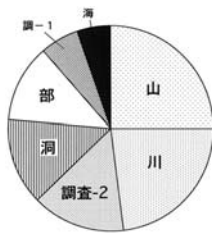


図-2 資料の活動種別

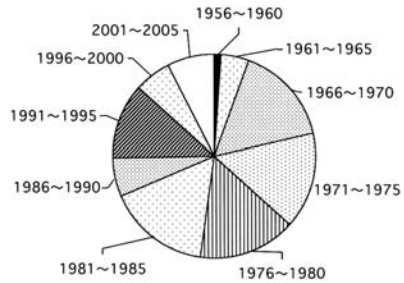


図-3 年代別資料数

## 3 資料の分析からの探検活動の流れ

### ・計画書と報告書からの活動数

ここで、資料から活動数や活動内容の考察を試みたい。資料の大半を占める計画書と報告書から年代別の活動数を数えてみた。計画書と報告書は重複を除くと、六〇三データある。このデータに部報「踏査」の活動史から得られたデータを補足して簡単な統計処理をする。

通常、合宿（活動）にあたっては、必ず計画書と報告書が出されるものであり、一年間に三回（春・夏・冬）合宿に行くすると六資料が残り、最低、山や川などの二チームが活動すると十二データあるはずであるが、十二データない年もある。これは、資料が紛失されたか、計画書だけで報告書が作成されていない可能性もある。

その年における、紛失した資料や報告書が作成されていない合宿の全体資料数に対する割合が、毎年均等であると仮定すれば、相対的に見て活動数の動向判断としては妥当かと思われる。ただし、「踏査」活動史から補足できなかった一九六二～三年と資料自体をデータ化していない近年（二〇〇四年以降）のデータは考慮に入れない。

・年度ごとの活動数と部員数（図-4参照）

創部からの部員数と活動数グラフを見てみると、部員が増えるのと活動数が増える訳ではないようである。創部十年目あたりで、部員数と活動数はピークに達するが、その後において部員数が減少したにも関わらず、多くの

合宿が組まれている年が存在する。また、活動数グラフ波形には四～六年間隔の大きな波があるようである。

この活動数の波形と部員数の推移からみて探検活動の

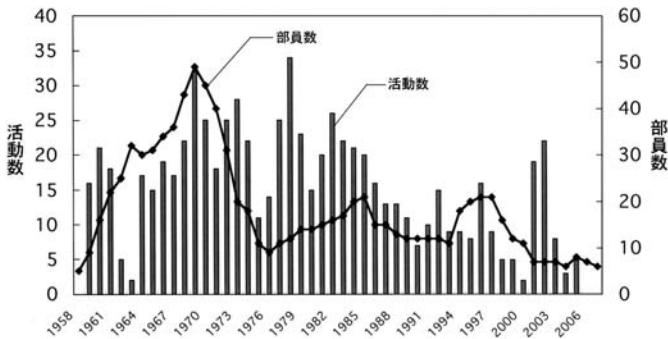


図-4 部員数と活動数

大きな流れを読みとることができる。

四～六年間隔を一時代として探検活動の傾向を追っていきたい。

・年度ごとの種別別活動数と主な探検活動

探検部において、探検の計画が実行されるまでに多くの過程を踏む。こんな探検をやってみたいと部員が考えたと企画書や趣意書が部内の企画委員会で審議され、そこで認められた計画は、その目標に向かって技術や経験を高めるために数多くのトレーニング合宿が組まれる。大学での活動期間は、四年間しかないので経験不足を補うために各計画に対しOBで組織される探検委員会のアドバイスと承認を受け実行に移されるのである。ゆえに、この活動数の内部には、ながしかの大きな探検があると考えられる。その探検活動の傾向を探るために、種別別活動数のグラフを作成した。(図-5参照)

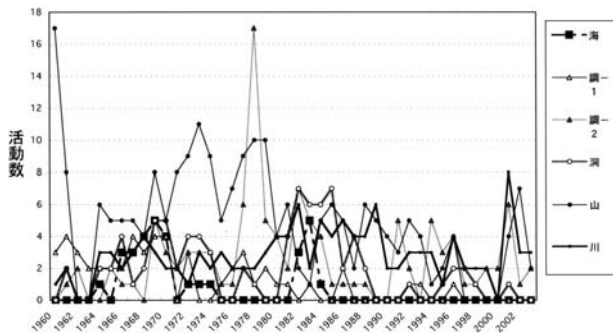


図-5 種別別活動数

① 創部から各パートが出そろうまで

(一九五八～一九六五年)

種別別活動数を見ると山岳探検が飛び抜けて多い。これは、地理的探検の代表とも言える未踏峰登頂の技術獲

得と共に、登山が野外活動技術習得の基本となる方法だからと考えられる。五十年の活動数全般をみても、その四分の一を占めることから、綿々として登山が続けられた理由となる。その次に多い活動が民族調査である。創部当初より地理的探検か学術的な調査活動を含む探検かが議論されており、ひとつの活動方針として国内における離島の実態を記録報告する調査探検が多く行われた。そして、その活動は、関西大学八十周年記念事業の一環として行われた一九六五年のペルーアンデス学術調査（隊長 杉原弘人教授）に繋がるのである。探検部としての初の海外遠征であり、ワイワッシュユ山群 Jirishanca Norte (6015m) をアタックし Santa Rosa East (5578m) の初登頂を果たしている。この時期にさまざまな種類の探検活動（パート）が形成され、探検部の方向性が確立されたのである。

### ② パート制から企画制へ（一九六六～一九七二年）

この時期の部員数は、五十年の歴史の中で最大人数を数える。各パート別に大きな探検が行われた。洞窟探検

では、第五次青海洞窟群調査 青海千里洞（一九六八）。河川探検では、黒部川上ノ廊下ノ廊下完全航行（一九七〇）。山岳探検では、アラスカ・ヘイズ山群（一九七一）。海底探検では、トラック諸島海底調査（一九六九）。民族調査では、フィリピン学術調査（隊長 横田健一教授、一九六八）、アマゾナス踏査ヤノマム族（一九七二）。これらの探検の他、技術や経験を積んだ部員たちが自らの力で、多くの探検に成果を上げた。この時期にOBによる探検委員会が組織され、企画制による探検活動が確立された。

### ③ 部員減少による少数精鋭化（一九七三～一九七六年）

一九六九年に最大の部員数四十九名を数えたが、この五年間で、六名までに減少する。人数が減少すると各隊・各企画に対して隊員数が少なくなるのは当然であろう。

この時期にはトレーニングとしての登山や縦走、そして河川探検と洞窟探検が行われた。河川探検ではコロラド河航行（一九七三）、日本横断航行（一九七四）。洞窟探検では、第十二次青海洞窟群調査 白蓮洞（一九七四）

などである。白蓮洞では、日本最深洞窟として、その姿が測量されている。

④ 新たな企画と模索（一九七七～一九八〇年）

誰も行ったことのない探検には、体力と技術を得る訓練と計画・準備期間が必要である。その探検という行為を、大学においての学業と平行して行うには、それなりの人材が必要である。そして、クラブとして部員減少は、存続に関わる危機である。ここで、部員の確保と新しい探検の企画のために、今までにはない種類の探検が試みられた。サバイバル合宿、ヨットによる探検、ハンングライダー、耕耘機、筏、埋蔵金探索などである。もちろん、登山技術やカヌー・ラフト技術は継承されており、特に河川探検では、北米大陸10000 km縦断航行（一九七九）で大きな成果を挙げている。

⑤ 探検活動の広がり（一九八一～一九八六年）

部員数も右肩上がりになり、新しい形の探検も加わって、再び多くの種類の探検活動が繰り広げられた。洞窟

探検や海底探検も復活している。洞窟探検では、パプアニューギニア洞窟探検（一九八四）。海底探検では、紀淡海峡水中探検（一九八三）。山岳探検では、ネパール高所登山トレーニング（一九八一）、ボルネオ島キナバル山遡溪（一九八五）。民族調査では、ザイル共和国バテンボ民族調査（一九八三）などである。注目すべきは、この時期に、偵察も含めて十回も海外合宿が組まれていることである。また、探検活動における装備や技術が、この時期に革新されている。探検には、その活動に応じた特殊な装備が必要であり、その装備は部員達の経験や工夫によって作成されて来た。激流に耐えうるゴムボートの開発や堅穴洞窟を登り降りするためのワイヤー梯子等である。これらの装備が、部外の開発者から購入できる時代に入ったのである。

⑥ 事故とその経験を糧にして（一九八七～一九九四年）

種類別活動数のグラフを見ると、五十年の歴史で常に行われて来た活動が河川探検であり、他の活動においても無事故で大きな成果を挙げてきた。しかしながら、残

念な事に一九八七年の中国岷江航行遠征隊にて、死亡事故を起こした。このようなことは大学の課外活動としても決して許されることではない。しかし、我々探検部はこの事故により、多くの事を学んだと信ずる。その後も河川探検の技術と探検魂は引き継がれタクラマカン砂漠縦断カヌー航行（一九九二）、ユーコン河カヌー航行（一九九四）と続く。また、洞窟探検においても国内の新洞が調査測量されている。

#### ⑦ 新しい探検の切り口（一九九五～二〇〇〇年）

この時期に、部員数は、二十人前後と増加する。人数が増えると探検活動も多様化するようであるが、興味深いのは、その企画の中に確固とした探検コンセプトをもった活動が現れることである。探検家スウェン・ヘディンが失敗したタクラマカン砂漠探検ルートをラクダと徒歩によって踏破するタクラマカン沙漠踏破（一九九五）。モンゴルを騎馬によってチンギスハーンの足跡を辿る、モンゴル騎馬遠征計画（一九九八）。熱帯雨林の林冠を独自の技術によって移動し、生態系を調査するマダガス

カル林冠探検（一九九七）、アマゾン林冠探検（二〇〇〇）。林冠探検においては、現地の研究者に、その技術を伝えて研究に役立てて頂いたことは、評価に値する。惜しむべきは、その新たな展開が今日においてないことである。

#### ⑧ 百周年へ向けて（二〇〇一～二〇〇八年）

近年は、部員数が十名以下と低迷している。このような少数人数では、多様な活動展開は困難である。しかし、活動数自体は減ることはなく、河川探検と山岳をフィールドとした活動的を絞って行われている。近年ではシーカヤックによる海上航行も行われ、今後の企画が望まれる。海外活動では、モンゴル・オルホン川航行（二〇〇五）、アラスカ・コバック川航行（二〇〇六）が行われている。時代は変わっても探検を成功させるものは、部員の技術・経験・体力・精神力であるが、それに加え最新のテクノロジーが付加されている。GPSによる位置把握、インマルサット通信衛星による電話通信、ランドサット衛星画像による探検地域の分析などである。五



十年の歴史によって培われた技術と経験を活かし、百周年にむけて探検し続けてもらいたい。

#### 4 写真資料について

合宿においては、各隊員が、装備係・食糧係・気象係・医療係・撮影係の役割を分担する。報告書には、その計画での問題点や改良点が記載される訳であるが、撮影に關しては、その活動場所が撮影に適した環境や状況ではないので、常に改良されてきた。その成果である写真資料は、探検活動の記録として重要な位置をしめる。一般的に、調査において、撮影記録を各写真について記録するのが通常であるが、調査を含む探検以外では撮影記録が少ないことが残念である。

写真等の映像資料は、資料全体の三分の一で、四一三点あった。写真の総枚数は一万枚を超えている。資料の内訳は、90%がアルバムであり、10%がフィルム・スライドである。近年では、ビデオの普及に伴い動画資料も残っているが、編集されていないものが多い。

記録としての写真は、数十年前の事実や状況を正確に現在に伝え、多くのことを語ってくれる。探検行為がなされる地域は、人の手が加わることの少ない大自然の地であったり、古くからの文化や風俗が保たれた民族が住む地域である。その自然や環境は、変わらないと思われがちだが、今日、写真資料を観察すると多くの地域において変化していることに気づく。それだけに、五十年間に撮影された本資料は、貴重なものであると言えよう。

#### 5 特筆すべき資料

ここに記載する資料は、記録や報告書として整理されていて今回の資料整理において再発見されたものや、その当時の隊員から寄贈された資料を選んだ。

- ① 中華民国 蘭嶼 Yami 族調査（一九六八年）カラ  
ーネガフィルム

この資料は、一九六八年に行われた民族調査の記録写真である。現在は開発されて少なくなった竪穴式住居や

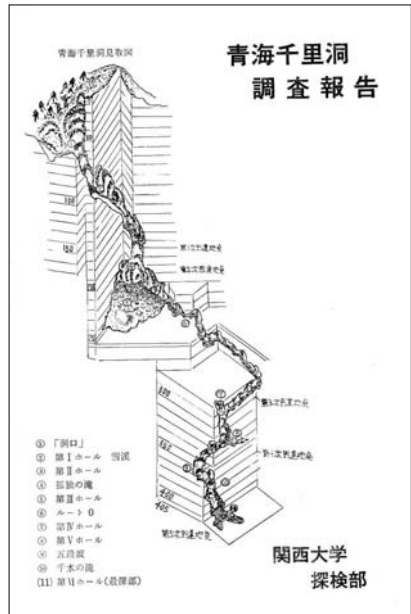


蘭嶼Yami族調査

高床式住居において、民族衣装をまとい普段の生活している姿を記録している。伝統文化を色濃く残す民族として、古くから文化人類学の研究対象になった地域であるが、生活様式が近代化した現在にいたる変化の過程として見ても興味深い。

② 青海洞窟群調査報告書 B5版製本 120ページ

一九六五年より一九七四年まで新潟県青海町マイコミ



平で行われた一連の洞窟調査報告書。この十年間の調査においてマイコミ平周辺（滝谷カルスト）の十六洞窟について測量や洞内生物、化石等の調査が行われた。国土地理院発行の地形図に「千里洞」が記載されている。また、この洞窟群の内、白蓮洞は日本最深洞窟（マイナス51.3m）である。一九七六年の他クラブの事故以降、これらの洞窟は立ち入り禁止になっており、誰にも入洞されることなく、ひっそりと眠っている。再び入洞出来る準備が整った時に、これらの資料は役立つことである

う。

③ アラスカへの道 探検部山岳技術研究会十年史

B5版製本 230ページ

この報告書は、一九七一年に行われたアラスカ遠征と、それに至る山岳探検パート(山岳技術研究会)の十年間の技術錬磨の記録である。アラスカ遠征では、Mt. Hayes 南峰の未踏峰(3567m)の登頂に成功しており、その登頂に至る苦闘が克明に描かれている。また、創部から、地理的探検を常にリードし、後の数々の探検の基礎となった登山技術は、この時期に確立されたと言って過言で



アラスカ遠征

はないだろう。その当時の記録としての本資料は貴重である。

④ インド ザンスカール遠征 カラースライド・

撮影記録

一九七六年に行われた、ザンスカールでの祭・生活・行政・チベット仏教の調査記録スライドである。そのスライド枚数は、千枚以上あり、それぞれに撮影記録カー



インド ザンスカール遠征

ドが付いている。今回、整理された写真資料のうち撮影記録が残っているのは、この資料のみであるので、今後の分析が望まれる。

⑤ 北米大陸10000km縦断航行 カラーズライド

一九七九年に行われたカヌーによる北米大陸の縦断航行記録。アメリカ南部のニューオリンズからミシシッピ川・サスカチュワン川を遡り、カナダのマケッケンジ



北米大陸10000km縦断航行

川を下り北極海のイヌビツクまで至る五ヶ月間、一万キロメートルに及ぶ記録写真である。

⑥ 関大式木登りマニュアル 「魁！木登り塾」A4版 107ページ

アマゾン林冠調査（二〇〇〇年）において確立された関西大学探検部独自の木登りマニュアルである。熱帯雨林の地上30mにも及ぶ林冠には特有の生態系が存在し、その調査は困難を極める。タワークレーンや熱気球に巨大な浮き輪を付けて林冠にアプローチする方法があるが、いずれも大がかりで費用は甚大である。関大式木登りは、洞窟探検で培われたシングルロープテクニクを応用して、林冠部にアプローチ、樹上で生活・移動する安価で有効な方法と言えよう。実際に、この木登り技術は、ブラジルの林冠研究者に伝えられて研究に役立っており、このマニュアルによって、関大式木登り技術の普及が期待できる。



アマゾン林冠調査

## 6 まとめ

関西大学探検部五十年の足跡を、数ページでまとめることは無理があつた。五十年間の活動総数は、八百近くにもなり、練習合宿を加えると千件を超える。

本文は、あくまでも資料整理によって得られた成果の考察と紹介である。これまでに、探検部二十年史及び四十年史が発行されているので、詳しくはそちらをご覧ください。

ただ、今回の資料整理に携わって、ひとつ言えることは、探検と呼ばれる行為は常に変化していることである。創部当初より、探検とは何かが議論されており、それは今日まで続いている。今後も新たな探検が生まれ、それは探検部百周年にむけて足跡を残していくであろう。その足跡の記録である計画書・報告書・映像資料は、しっかり残しておいてもらいたいと希望する。

最後に、この『年史紀要』に執筆の機会を与えて頂いたOB諸兄弟姉に感謝いたします。

## 注

- ※1 パート 探検の種類や分類。探検部においては、さまざまな種類の活動が行われる。
- ※2 媒体 計画書、報告書、写真、収集物等
- ※3 露出マスコミ 探検という特異な活動から、マスコミに取り上げられることが多く、新聞記事・TVニュース録画等の資料が含まれるために新聞社名等を記載した。
- ※4 四桁の番号 海底探検なら1000番代 部内活動

なら7000番台など

※5 外苑合宿 基本的な野外活動技術や体力の習得を目的に、学内の裏山にて行われる露営合宿。ここ十年は、行われていない。

※6 歩荷(ポッカ) キスリングと呼ばれるザックに砂や石を40kg以上荷入れしてから歩行する過酷な訓練。外苑合宿でも行われる。

※7 林冠探検 熱帯雨林において30mにもおよぶ高木の樹上生物調査を目的にした探検。

みずの ひろし

JIA 日本建築家協会登録建築家

NPO 法人街屋集団正会員

(有)水野建築設計事務所代表

一級建築士・測量士

関西大学文学部地理学・地域環境学専修非常勤講師